
ループ20

甘辛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ループ20

【Nコード】

N5112B

【作者名】

甘辛

【あらすじ】

チームとは、奇術マジックの使い手である奇術師達マジシャンが集った、言わば何でも屋である。世界各地に様々なチームがあり、彼等は依頼された任務は全て、例えば夏休みの宿題から世界征服まで、完膚なきまでに非の打ち所もなく遂行するのだ。ただし、それ相応の代金は必要で…。これは、全てが奇術の世界の、ある奇術師の少年の物語。

revolve:0

この世界はつまらない。

ある男がそう言いました。

その男はたいへん貧しく、一日のご飯にも困っていたほどでした。

彼は、世界の全てが大嫌いでした。

憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて、仕方ありませんでした。

彼の職業は、地面に道具を並べては道行く人に手品をみせる、言わばマジシャンでした。

しかし、かぶり過ぎでよれよれになった帽子からハトを出してみても、薄汚れたステッキから花を出しても、誰一人振り向いてくれません。なので彼はお金がなく、毎晩道端に薄っぺらい毛布を敷いて寝ていました。しかし誰も彼に、同情さえしないのです。彼はそんな人々を、そんな世界を、憎んで、恨んで、怨んでいました。ある日のこと、男はいつものように路上で、手品を披露しようと道具を一つ一つ確認していました。

すると彼の目の前に一人の小柄な男が立ち、こう言いました。

世界を殺す気はあるか。

男が呆気にとられ、しばらく何の事だか分からずに居ると、謎の男は続けました。

世界に絶望する者は、世界を変え得る者。

世界を忌み憎む者は、世界を創り直す者。

私とともに、新たな文明を築く気はないか。

男は、その謎の人物の言葉に何故か引きつけられました。
そして、こう考えたのです。

人々に、手品の素晴らしさを伝えたい。

自分を蔑んで来た人々を、手品で見返したい。

自分の人生の全ては、手品に注いで来た。

いつか人類が皆、手品を使い、手品に頼るようになったら…。

その後街から、一人の男が消えました。

それから幾つもの月日が経ち、その昔暖炉だった暖房器具は、ストーブになりました。その昔かまどだった台所の要は、コンロになりました。

全てが動く原理は、マジック奇術と呼ばれるものでした。

奇術があれば火が起こり、奇術があればネジを捻れば水が出る。
こうして、この世界に奇術は無くてはならない物になりました。
もう奇術なしで生きることが出来る者はいません。

誰も、

奇術を馬鹿にしません。

そんな世界が築かれたのでした。

そう、その新しい世界の基盤の裏に、一人の貧しかった男が深く関係していることは、誰も知らないのでした…。

revolve:1 食い逃げ

軽快に口笛を吹きながら、一人の青年が喫茶店に入って行く。

レンズに色の着いた大きなゴーグルのせいで表情は見えないが、身長からして大体19〜20歳位だろう。目を引くような鮮やかな金髪を立てていて、余計に周囲から浮いたイメージを持たせている。

「よう」

彼は喫茶店のドアを開いて、中のカウンターの向こう側にいる、どうやらこの店のマスターらしい女性に話し掛けた。客は4、5人で、ざわめきに声が消されるということはない。

「また駄目だったよ。結局、あれだけ探して当たり無し、か」

彼は続けた。話し掛けられた女性は、まだ音を立てているサイフォンから目をはなし、青年を見る。

「だろうね。あたしもそんなに期待はしてなかったけど」

女性は顔にかかった髪を手で払い、

「ブラックよね？」

と青年に問うてカウンターの空いた席に淹れたばかりのコーヒーを置いた。

その女性は風格から青年より2歳程年上のように、左目は長い前髪がかかっていて見えない。割と安めの銘柄の煙草を吸い、茶色のショートヘアを後ろで結んでいる彼女は、泣き黒子が特徴的ななかなかの美人だ。

青年は椅子に座り、軽くお礼を言ってコーヒーを一口飲む。

「…あーあ、気が重いよ…リーダーに報告しなきゃいけないんだよな…」

そう青年が言うと、女性は微笑んだ。

「大丈夫よ。リーダーもさつき諦め半分に、あんたが帰ってくるのが遅いって愚痴ってたわ…」

まあ、そりゃそうよね、すぐには無理に決まってるもの…」

「新たな奇術師^{マジシャン}の発見なんて…」

女性は溜め息を吐きながら言った。

「仕事もなかなか入って来ないし、これじゃ赤字もいいところよ。この喫茶の収入でなんとか成り立つてる感じだもの」

その言葉に青年も苦笑し、丁度よく冷めたコーヒーをいっきに喉に流しこみ、言う。

「おいおい、俺のバイトも無視すんなよ…」

…で、本当、これからどうしたもんかね…証言が有ったところには全部行つたから…な……」

彼は空になったコーヒークップを置こうとして、

取り落とす。

その時、

青年の目に、

信じられない光景が映つたのだ。

計30枚。

今、彼が座っているカウンターの隣りに、あり得ない数の皿がある。

「な……………っ!？」

しかもその皿全て、主食用の大皿。

想像してもらえらるだろうか、一人一人の胃袋に三十人分のスパゲッティが入ったら、果たしてどうなるか。

そして、大きな声でそのあり得ない客は叫ぶ。

「おう、おかわりくれ!大盛り!」

しかもその胃袋の持ち主は、中学生かそのらの少年だった。

青年は会話に集中していて、その少年…いや、怪物の存在に気付いていなかったのだ。

女性は困惑した顔で、その常識破りな客を見る。

「あの…お客さん、悪いんだけどここ喫茶店だからさ、そんなに料

理作るような余裕無いんだけど……」

「ちえ……」

本来食事は軽食が主流の筈の喫茶店で、このような客は珍しいどころかかえって迷惑極まりない。そんなこととはつゆしらず、少年は皿に残ったソースを未練がましくフォークで集めていた。

青年は呆然と、その少年を見る。

年齢的に見ればやはり子供で、まだ成長過程にある身長だと一目でわかる。おかしな帽子を浅く被っていて、その部分は彼の濃い茶髪は隠れていた。

そしてその少年には他の客とは明らかに違う部分が（食事の量を除いて）二つあった。

一つは、両目の下の刺青だった。二本の線のように入れられたそれは、顔というもろに外に晒し出す部分にあるので、嫌でも道行く人々の注目を集めることだろう。

もう一つは、背中に背負った兎の縫いぐるみだ。傍若無人そうな少年の外見に反して、とても繊細な愛らしい作りの品である。どう見ても、彼の趣味や好みによる物ではない。

青年はさすがに不審に思い、声を掛けた。

「なあ……」

「あ？何だ？」

少年は振り向いた。その口の周りには、食事量に見合った大量のソースが付着しており、青年は吹き出してしまいそうなのを必死で堪える。

「き……君、その……」

そうして青年はいろいろと問いたい（突っ込みたい）ことが有る中、厳選し、少年に自らの最大の疑問をぶつけた。

「金……、持ってる？」

「……………」

少年はその質問に数秒固まり、そしてふうー、と息を吐いて言った。

「…なあ、一期一会って言葉、知ってるか？」

「いや、そうじゃ無くて、お金…」

「うんうん、だよな、そくだよな…」

じゃっ…」

そして少年はゆっくり椅子を降りて、

「後はよろしくッ！！」

あろう事か青年にこう叫びながら、

ドアを勢いよく開いて猛ダッシュ…

食い逃げした。

「んっのやる食い逃げしやがったああああッ！！！！」

青年はその行為に驚き、叫びながら追おうとして全力で走り出す。

只でさえ赤字であるのに、あれだけの量を食い逃げされれば明日の食事にも困るほどだろう。

店の外に出ると既に少年の姿は遥か彼方へと消えており、路地に入り込まんとしていた。

「くそ…食べた直後にあんなだけ走れるなんて…ッ」

どんな胃袋してんだ、と言いながら青年は走る。

一見差は歴然だが足の長さの分だけ青年は有利なので、少しずつ食い逃げ犯に追いついてきていた。

食い逃げ犯は後ろにいる青年を見て驚き、更に細い道へと入り込んで行く。

「！

…やっべ…」

と、不意に少年は立ち止まった。

その隙に青年はすぐ後ろまで迫る。

何故立ち止まったかって、その道はそこで行き止まりだったのだ。

青年は疲労に息を荒げて、少年に話し掛ける。

「ぜーっ…はーっ…」

もう、逃げられないぞ…、おとなしく、捕まって、くれよ…。今なら、警察には突き出さないから、な？」

「くっそ…」

少年は身構え、俯き、何かを決心したかのように顔を上げると、腰のバッグに手を伸ばして、何か、を取り出した。
そして。

「でああああああッ！！」

その何かを地面にばら蒔き、その上に飛び乗った。

「飛べええッ！！！！」

そして、何と。

その何かは少年を乗せたまま、青年の頭上を飛び越えて飛んで行ったのだ。

「な…何っ！？」

その何か、まだ幼い少年ながらも一人一人の体を乗せたまま飛んでいくその何かの正体。

頭上をそれが横切った時に、青年は見た。

ハート。

スピード。

ダイヤ。

クローバー。

そう。

それは、トランプだったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112b/>

ループ20

2010年10月11日11時36分発行